

正月一七日

ストラスブルグ 緊急病室内

合掌

一昨日深夜列車でブリュッセルからストラスブルグに到着。翌一六日欧州評議会(PACE)前でサイド・アミン氏の側近ミカエルに会う。二十二歳の青年で昨年からサイド・アミンの平和行進に参加して氏を身近にサポートしている。評議会前の歩道沿いに二十八日目を迎えるサイド・アミン氏の無期限断食のピケツトが立っている。小さい声明と氏の来歴が紹介されている。

氏は衰弱はげしく救急車で病院に運ばれた。夕刻病院に氏を訪ねる。ちょうど、PACE代表者三名と出会う。彼らも氏の状態を案じて断食中止を訴えに来たのだ。PACEのプレスリリースを持参している。

ルドルフ・ビンディグドイツ連邦議員でPACEのチェチェン報告書作成者がサイド・アミン氏へのアピールを発表した。このチェチェン報告は冬期セッションが開かれる二十五日に評議会で討議される予定だ。

訴えに来た三名はこの二十五日にPACEはサイド・アミン氏を正式に迎え、評議会会議議長、人権委員長他との会見を約束し、この大事な日程を成功させるためにも今すぐ断食を中止するよう訴えた。

サイド・アミン氏の状態は衰弱の一語につきる。力弱く手を握る。話す言葉は少なく一言一言が口からもれるだけ。しかし私たちの話は理解し、周囲で何が相談されているか、何が起きているかははっきり理解している。

私もサイド・アミン氏が早く断食を中止して体力を回復してもらいたいと願う。氏にもすすめている。が全体の状況からして、氏の非暴力行動が十二分に世間に紹介されたかどうかは疑問が残る。

今日一日ストラスブルグにいただけで氏の行動のバックアップ体制がほとんど存在していなかった事がわかる。刻々と変わる状況をリアルタイムで世界へ知らせる機能がない。フランス語、英語を充分に利用してマスメディアへつなげる人もいない。フランスのチェチェン委員会がパリにもストラスブルグにもあつたはずだがこういうフランス人たちの支援が周囲にいないのも不思議だ。彼らがもつと早くから積極的にPRの支援をすべきはずなのだが、そうはなっていない。まことに残念だ。

もし今この緊急病室に報道陣がつかまけ、広く報道されれば事態はもつとよい方向に行くはずなのに。私は病院からロンドンのザカエフ氏の側近アラギ氏に電話してストラスブルグの状態を訴えた。チェチェンリーダー達の支持声明を発表し、代表がストラスブルグに急行すべきだと訴えた。パリのチェチェン委員会のジリアンにも夜遅く電話して、パリ・ストラスブルグのフランスチェチェン委員会がメディア関係者を動員する支援をお願いした。

パリのアヒヤド・イディゴフ(前チェチェン議会外交委員長)とも話し、欧州のチェチェン政府代表が誰か病院に駆けつけるようお願いした。

キエフ、モスクワの私の弟子達に、ウクライナ、ロシアの人権グループ、メディアにできるだけ広く伝えるよう指示した。また、ブリュッセル、ジュネーブの友人を通じて国際平和団体や、EU、UNの人権委員会が行動を起こすようお願いした。

今回私は単独で動いているので、私の側近にも、インターネットを駆使する人物がいないので、私自身にもプレスリリースやアピールを発信する機能がない。(セルゲイ師・イスラムはスイスのビザを申請中で、二十一日ベルギーヨーロッパに入る事ができる)

来る二十三、四、五日、PAC Eの冬期セッションが始まる時期ヨーロッパのチェチェン難民が各地各国から集結する予定だ。まだ一週間の時間がある。サイド・アミン氏が断食を続行して、それまでもちこたえられるかどうかはわからない。ぎりぎりの事態だと言える。この一週間でどこまで世論を目覚めさせ、動員することができるとも一勝負であろう。

次に今回ロンドン、ブリュッセルを巡って見て、欧州におけるチェチェンの人たちが置かれている状況について、私の考察をのべる。

ブリュッセルではかつてチェチェン外相のセクレタリを務めていたロマン氏と長時間話し合った。ロンドンに留学し経済学を学んだチェチェンリートの一人である。又、三年前、私達のインド、パキスタンの核戦争危機の際の平和行進に参加し、今、ベルギーに亡命しているレチエ・ティモール兄弟と半日を共にした。

今、彼らの眼前には何の希望もない。何の人生の目標もない。一日を生き延びる戦いをチェチェンで、そして亡命を果たすまでの難民生活で、そして新しい欧州の社会の中で、一人一人があまりにも孤独な戦いを戦いつづけてきた。

一人一人の余りにも思い体験を背負いつづけた道の前にはまだ何の希望もないのだ。彼らの余りにも宿命的な苦難を説明しうる言葉さえもない。現代世界の最も根源的な問いそのものを彼らは背負いつづけている、しかし答えはない。

既存の政治、イデオロギー、宗教も、この答えを提供してはくれない。百万言の国際政治の解説者も、分析や説明はあつてもこの世界が今後、誰によつてどのように未来が開かれていくのかの最終的な生き方の答えにはならない。

今チェチェン人達の意識の流れ、精神的な戦いは深刻な転換期にさしかかっているといえよう。

今彼らがどのような答えを自らの行動で作つていくのか、新しい世代は真剣にそれを探っている。既存のレジスタンス、独立派政府もこの新しい目覚めの突破口を提供できないがゆえに、苦しんでいるのである。

サイド・アミン氏の二七日現在午後二時半の現状を伝える。一切の延命処置なしで断食続行。病院側は家族に、断食を中止しなければ今日四時には退院させると通告。今の段階で中止すべきかどうかサイド・アミン氏は私の意見を求めている。本当を言えばあと二日間の猶予がほしい。少なくともPAC Eの指導者、UN、またはEUのリーダー、欧州議会の政治家、チェチェン政府代表などが報道陣の前で一同に断食中止の要請と一定の政治的方向性を確約する段取りを組織したいところだがこの手だてが今の私は持ち合わせていない。

深刻なときを刻一刻迎えている。

寺沢潤世

日本チエチエン支援関係者一同

私のホテルの番号 部屋番号666

TEL: +3333(O)3-88-323200

FAX: +3333(O)3-88-2325192

ミカエルの携帯

+3333(O)631-351-694